

勝解(adhimukti)・廻向(parīṇāmana)・随喜(anumodana)について

——大乘の有漏の修道——

兵 藤 一 夫

はじめに

仏教では、覺りを獲得するためになすべき実践のあり方が幾つかの形で表現される。例えば、八正道^①は釈尊が最初に説いた実践のあり方である。初期の經典にはそのほかに多くの実践方法が説かれ、それらは三十七菩提分法として一まとめに表現されることが多い^②。また、戒・定・慧の三学は、仏教の学習項目を三つにまとめたもので、順次に生活習慣を清浄にし、瞑想を修して、智慧を獲得することを示している。

大乘仏教においては、最高の覺り（無上正等菩提）を獲得するためには二つの資糧、福德と智慧の資糧、を完全な

ものにすることが必要であるとされる。般若経では、それが六波羅蜜を修習することによって成し遂げられることになる。その場合、六波羅蜜の中核となるのが般若波羅蜜であり、他の五波羅蜜の修習には般若波羅蜜の修習が不可欠であるので、般若波羅蜜を修習することが強調されている。

般若経（特に『二万五千頌般若経』）を道の立場から注釈している『現觀莊嚴論』は、菩薩がこの福德の資糧である善根を積むことを有漏なる世間道としての修道に配当している。この有漏の修道は、お互いに関連しあう三つ、すなわち勝解作意、廻向作意、随喜作意に分けられる^③。これら三つの修道のあり方は、従来の阿含・ニカーヤや部派仏教における修道のあり方とは相当に様相が異なっている。

そこで、この小論では、般若経やその注釈である『現觀莊嚴論』に基づきながら、大乘の世間道における善根を積む仕方の特徴を検討する。

一 『俱舍論』における有漏の修道

『現觀莊嚴論』における有漏の修道の特徴をはつきりさせるために、それまでの伝統的な有漏の修道（世間道）の代表的なものとして『俱舍論』のそれを見ておくことにする。

『俱舍論』第六章「賢聖品」には、修道は有漏と無漏、すなわち世間道と出世間道であることが説かれる。その中、無漏の出世間修道に関しては、未至定に依拠する無漏の修道は欲界・色界（四静慮）・無色界（四無色定）の九地すべての修惑を断じ、それ以外の四静慮・四無色の八地に依拠するそれは自地と上地の修惑を断ずる。そしてこれら修道は四聖諦を所縁とし、無常などの十六行相を行相としてゐる。

有漏の世間修道に関しては、四静慮など上の八地に依拠する有漏の修道はすぐ下の地の修惑のみを断じ、自地や上地の修惑を断ずることはできない。これら修道はすぐ下の地を厭い離れて現在の地を喜ぶことによって下地の修惑を

厭離するからである。したがって、有漏の修道によつては最上地である有頂の修惑を断ずることはできないことになる。また、これら有漏の世間道は見道を獲得する前に「行ずることも可能であり、それによつて所定の修惑を断ずることができる」。

これらについて『俱舍論』には次のように説かれている。この有学は何によつて何からの離染（vairāgya）を得るのか？

出世間「道」によつて有頂からの離染がある。

(VI-45cd)

世間「道」によつてではない。どうしてか？ それ（有頂）より上の世間「道」はないからである。あるいは「世間道は」自地に属する「煩惱」を対治することはないからである。どうして対治することはないのか？ その「地の」煩惱が「世間道において」随増するからである。なぜなら、Aなる事物（*vasu*）においてBなる煩惱が随増する場合、Aなる事物がBなる煩惱の断のために働くことはない。そしてAなるものがBなるものの能対治である場合、AなるものにおいてBなる煩惱が随増することはない。

他は二種である。(VI-45d)

有頂とは別なすべての地からの離染は、世間〔道〕によっても出世間〔道〕によってもある。^⑦

また、有漏の世間修道の所縁と行相について次のように説かれている。

世間の解脱と無間の道は順次に、寂靜などと龜大などを行相としている。(VI-49abc)

解脱道は寂靜などを行相としており、無間道は龜大などを行相としている。さらにそれらは順次に、

下〔地〕と上〔地〕を対境としている。(VI-49d)

解脱道は、所応の如くに、寂靜(*śānta*)と勝妙(*prāṇā*)と出離(*nīśarana*)とということから上地を「所縁として」觀察する。無間道は龜大(*audārika*)と苦(*duḥkhā*)と障壁(*śūlābhittika*)とということから下地を「所縁として觀察する」。「上地のように」寂靜でないから「下地は」龜大である。大造作であるものであるからである。「上地のように」勝妙でないから「下地は」苦である。多くのより龜大なることよって違逆するからである。「出離でないから下地は」障壁である。その同じ「地」によってその地を出離することはできないからである。牢獄の壁が乗り越えられない如くである。その逆が寂靜と勝妙と出離の行相で

ある。^⑧

有漏の修道の所縁と行相は、厭離すべきすぐ下の地を所縁としたときその地を龜大と苦と障壁という行相で捉え、喜ぶべきすぐ上の地を所縁としたときその地を寂靜と勝妙と出離という行相で捉える。このように、上地を喜び下地を厭離することにより下地の修惑から離れる、すなわち下地の修惑を断ずることになるのである。しかし、上地を喜ぶことはその地を味著することでもあり、その上地の煩惱が随増するのである。そのためにその道は有漏なる世間道とされる。

二 『現觀莊嚴論』における有漏の修道

『現觀莊嚴論』における修道も有漏と無漏に分けられるが、その内容は『俱舍論』のそれとは大きく異なっている。『現觀莊嚴論』第二章「道智者性」は菩薩道(大乘)の見道について語った後、修道について言及するが、そこには勝解作意・廻向作意・隨喜作意の三種の有漏の修道と、成就行と畢竟清淨の二種の無漏の修道が説かれている。その中、有漏の修道の内容を、『現觀莊嚴論』に対するハリバドラの『小註』に基づきながら検討してみよう。^⑨

(1) 勝解作意

まず、『小註』は修道の全般的な説明とともに、勝解作意について次のように述べる。

修道は有漏と無漏の区別によって二種である。そして有漏の修道は勝解と廻向と随喜の作意と呼ばれるものであるが、その中で最初に勝解作意と呼ばれる修道について語る。

勝解「作意」は、自利 (svārtha)、自利・利他 (svapārthika)、利他 (pārthika) の三種であると知られるべきである。これはまた、下、中、上品があつて、それぞれが三種であると考えられる。さらに下下品などに分類されることにより、それはまた三種である。そのようにして二十七種であると考えられる。(II-18~19)

「勝解作意は」自利と利他と「自利・利他」の両者を所縁とする三種であり、「般若波羅蜜はその自利などを生ずる処である」と勝解のままに見る善法を依持 (adhisṭhāna) としても、修道に関しているから「聖道の」最初に現前化しないものである。

さらに、これら「三種」はそれぞれ下品などの区別によつて三種あり、さらにそれらはそれぞれ下品などの区別によつて三種あるから、そのようにして九の三で

あるから、勝解「作意」は二十七種である。

それを修している菩薩を喜ばせるために、そのように勝解することに関して仏陀たちによつて称讃 (stuti) などがなされる。^⑩

『現観莊嚴論』における有漏の修道は、勝解作意、廻向作意、随喜作意の三種であるとされる。ここに引用したハリバドラの注釈では「有漏」の意味は明確ではないが、見道の後の修道において生ずるものであると述べられていることから、いわゆる後得「清浄世間」智にあたるものであらうと推測される。タルマリンチェンは「有漏」という意味を次のように注釈している。

これら「三つの作意」が有漏として確立されるのは、語とその対象を混ぜて捉える分別を伴っていることに對して有漏として確立されるが、所断として撰せられた有漏として確立されるのではない。菩薩が修道の後の階位において福德資糧を円満する支分として繰返し努力することによつて生じせしめたものであるからであり、修所断を「断ずる」努力によつて「修道を」生じせしめた「声聞・独覺の」聖者にもないからである。もし「勝解が」所断であるならば、修所断とされなければならず、大乘の聖者の修所断でもあり、修道でも

あるような事態として誰もなすことはないからである。^⑪ また、彼はこの『小註』の内容を次のように注釈している。

大乘の修道の勝解〔作意〕の自性は三種である。自と他と両者の利益を所縁とすることによって三つあるからである。大乘の修道の勝解〔作意〕が、聖道の最初に現前化しないのは理由がある。〔大乘の修道の勝解作意は〕母（般若波羅蜜）を三つの利益を生ずる処であると勝解のままに見る善法、すなわち勝解の対境たる般若波羅蜜、を依持としていても、後得清浄世間の修道に関して獲得する道であるからである。これら三種の勝解ともそれぞれ三種と三種である。それぞれ下品などの区別によってである。下品などのそれはまた、三種と三種である。それぞれ下品などの区別によってである。まとめて、そのようにしてと言う。

一般的な勝解の対境は聖教と正理によって決沢される事柄であり、修道の勝解の対境は典籍と道と果の般若波羅蜜である。^⑫〔勝解の〕自性は道の般若波羅蜜を等至において修習することから得られる後得としての、〔典籍・道・果の〕三つの般若波羅蜜が〔自利・利他・二利〕三つの利益を生ずる処であるとの深い確信

に至った信解と淨信である。^⑬

これによれば、勝解作意は聖道の最初である見道の後に生ずる、後得清浄世間に関した道であることが明言される。そして、この勝解作意の対境は般若波羅蜜であり、その自性は般若波羅蜜（母）が自利などの三つの利益を生ずる処であると深く確信することである。

『現觀莊嚴論』がこのように勝解作意として解釈することになる般若經本文はどういう内容になっているのであろうか。『三万五千頌般若經』の勝解作意に相応する初めの部分は次のようである。^⑭

神々の主シヤクラは次のように世尊に申し上げた。

「世尊よ、ある善男子・善女人がこの般若波羅蜜を書き留め、書物の形にしたのち保持するとします。そしてそれらを花・香料・御香・花輪・塗香・香末・衣・傘・旗・幟によって、そして四方から飾燈と多種の供物によって尊敬し、尊重し、大切にし、供養するとします。また、般涅槃した如来阿羅漢正等覺者の遺骨をストゥーパに安置し、安置した後、世話をし保存し〔尊敬をもつて〕語り、そしてそれら遺骨を尊敬し、尊重し、大切にし、花・香料・御香・花輪・塗香・香末・衣・傘・旗・幟によって供養するとします。その

場合、二つの中のどちらがより多くの福德を獲得するのですか？」

そのように言われたとき、世尊は神々の主シヤクラに次のように仰せられた。「それではカウシカよ、おまえ自身にそのことを私が尋ねよう。おまえが了解するままに説明しなさい。次のことをおまえはどう思うか？ 如来阿羅漢正等覺者には一切智者性とかの如来の身体が成就されているが、如来阿羅漢正等覺者は無上正等菩提の等覺とその身体をどんな道を学んで成就したのであるか？」

そのように言われたとき、神々の主シヤクラは世尊に次のように申し上げた。「世尊よ、如来阿羅漢正等覺者はまさにこの般若波羅蜜において学んで、無上正等菩提の等覺とその身体を成就されたのです」

世尊は仰せられた。「カウシカよ、それはその通りである。その通りである。如来阿羅漢正等覺者は般若波羅蜜において学んで無上正等菩提とその身体を成就したのである。そういうわけだから、カウシカよ、その身体なる身の獲得によって如来如来と呼ばれるのではなくて、一切智者性が得られたとき、如来如来と呼ばれるのである。カウシカよ、この一切智者性なるもの、

それは般若波羅蜜から生じたものであり、同じく如来のこの身体なる身の獲得も般若波羅蜜から生じたものであるから、一切智者の智の所依となっているのである。そのように所依に依拠して、一切智者の智の獲得が起り、仏・法・僧が起るのである。そのように、かの「如来の」この身体の獲得は一切智者の智を因としており、「それは一切智者性の智の」所依となっているから、すべての有情たちにとって、チャイティヤとなったもの（身体たる遺骨）は敬礼され、恭敬され、尊重され、尊敬され、供養され、賛嘆され、祈願されるべきものとされるのである。同じように、私が般涅槃したときも、この身（遺骨）は供養されるであろう。そういうわけだから、カウシカよ、善男子あるいは善女人はこの般若波羅蜜を書き留め書物の形にした後、尊敬をもって語り保持し、花・香料・御香・花輪・塗香・香末・衣・傘・旗・幟によって、そして四方から飾燈と多種の供物によって尊敬し、尊重し、大切にし、供養するとすると、この者こそがかの「遺骨を供養する」者よりもより多くの福德を獲得するのである。それはどうしてかといえば、カウシカよ、一切智者の智がその善男子あるいは善女人によって供養されるべき

であるからである。

カウシカよ、般涅槃した如来の遺骨を七宝でできたストゥーパに安置し、あるいは七宝でできた箱を作って運び、それを敬礼乃至祈願し、花・香料・御香・花輪・塗香・香末・衣・傘・旗・幟によって、そして四方から飾燈と多種の供物によって尊敬し、尊重し、大切にし、供養するとするであろう者と、そしてこの般若波羅蜜が書き留められあるいは書物の形にされて、

「それを」尊敬し、尊重し、大切にし、供養・賛嘆・祈願するであろう者とのうち、後者が前者よりも多くの福德を得るであろう。それはどうしてかといえば、一切智者の智が彼によって供養されることになるからである。なぜなら、「他の」五波羅蜜はそれ（般若波羅蜜）から生じたものであり、内空乃至無自性空はそれから生じたものであり、「四」念処・「四」正断・「四」神足・「五」根・「五」力・「三七」菩提分・「八正」道・「六」神通・「四」聖諦はそれから生じたものであり、四無量・「四」静慮・「四」無色定はそれから生じたものであり、如来の十力・四無畏・四無礙解・十八不共仏法はそれから生じたものであり、一切の三昧・陀羅尼・解脱はそれから生じたものであり、一切

有情の成熟はそれから生じたものであり、仏国土清浄はそれから生じたものであり、菩薩大士の家系円満・受用円満・眷族円満はそれから生じたものであり、大慈・大悲はそれから生じたものであり、「中略」不可思議・無比・無上・この上ない・無等の一切相智者性はそれから生じたものであるからである」(以上が下下品の自利の勝解作意)

〈中略〉

シャクラは申し上げた。「世尊よ、この大波羅蜜とはすなわち般若波羅蜜です。なぜなら、世尊よ、この般若波羅蜜において行じている菩薩大士たちは一切の有情の心行を知りますが、有情を了得しません。命者乃至感受者・知者・見者を了得しません。色乃至識を了得しません。〈中略〉四無量・四静慮・四無色定を了得しません。四聖諦を、八解脱を、九次第定を、六神通を了得しません。〈中略〉菩提を、仏陀を、仏陀の徳性を了得しません。なぜなら、般若波羅蜜は了得する仕方では立てないからです。それはどうしてかと言いますと、了得の手段・主体・対象となる自性は存在せず、了得されないからです」

世尊は仰せられた。「カウシカよ、それはその通りで

ある。なぜなら、カウシカよ、菩薩大士は不可得という仕方では般若波羅蜜において行じており、菩提さえも了得しない。ましてや菩薩の徳性を「了得しようか」シヤクラは申し上げた。「世尊よ、菩薩大士は般若波羅蜜だけにおいて行じ、他の波羅蜜においては行じないのですか？」

世尊は仰せられた。「カウシカよ、菩薩大士はすべての波羅蜜において行じ、ただ般若波羅蜜においてだけではない。そして、彼は不可得という仕方では、布施波羅蜜を了得せず、施者も了得せず、布施の受者も了得しない。〈中略〉菩薩大士が布施をするとき、般若波羅蜜が先行し導き手となる。〈中略〉一切智者性乃至一切法の不可得という仕方では、般若波羅蜜が先行し導き手となる。例えばカウシカよ、ジャンプ洲の木々は種々の葉・木花・花・実を持ち、種々の高さ・形・幅を持っているが、それら木々の影には区別や種々は了得されず、「影」と呼ばれる。ちようどのそれと同じく、カウシカよ、般若波羅蜜、一切智者性に把握された五つの波羅蜜には区別や種々は了得されない。不可得という仕方によるからである」(以上が上品の利他の勝解作意)^⑮

このように、『三万五千頌般若経』には、如来の本質たる一切智者の智は般若波羅蜜より生じたものであり、その他のすべての如来の属性やすべての善法とされるものも同じ般若波羅蜜から生じたものであることを深く確信して、それを書き留め保持し他の者たちにも説いたり書写させたりして、尊重することが、如来の遺骨を供養することなどよりもはるかに多くの福德資糧を積むことになることが示されている。それが勝解作意である。しかも、この勝解作意は不可得という仕方ではなされる、すなわち、一切の法を勝義としては了得せず言説として了得する仕方である。

(2) 廻向作意

次に、廻向作意について考えてみよう。『小註』は次のように述べる。

勝解を次のように廻向することから二番目の廻向作意と呼ばれる「修道」を語る。

殊勝な廻向がある。その「の廻向」の作事は最上である。そしてそれは、不可得の行相を有したもの、不顛倒の相あるもの、遠離したもの、仏陀の福德資糧の自性の憶念を行境とするもの、方便を有したもの、無相のもの、仏陀によって随喜されたものの、三界に属さないもの、そして別な廻向は、大

福德を生ずる本性を有した下・中・上品の三種である。(II-21～23)

前述の勝解の殊勝（viśeṣa）、不可得（anupalambha）、不顛倒（aviparyāsa）、遠離（vivikta）、如来の善根の集まりの自性の憶念（atthagatakuśalamūlasamūhasvabhāvanusmarāṇa）、方便善巧を有する（śū）と（sopāyakuśala）、無相（animitta）、仏陀の印可（buddhānūjāta）、三界に属するもの（traiḍātukāparāpāna）、大福德を生ずる下・中・上品というような名を有した「廻向」作意によって、順次に、無上菩提（anuttarabodhi）、戒などの蘊（skandha）、廻向の心（pariṇāmakacitta）、我などを伴う事物（ātmādiyuktavastu）、三時の仏陀の善（traiyadvikabuddhakuśala）、布施など（dānādi）、因相（nimitta）、一切の道（sarvamārga）、欲などの界（kāmadhātū）、十善などの業道（dasakuśalādikarmapatha）、預流果など・無上菩提に住した者たち（anuttarabodhiprasaṅga）、と「言説として」了得することによって、三方軌（navatraya）^⑩の所化の有情に道を説示する因の本性と作用を伴ったもの（方便）でもって、尽きることなく

一切の有情のために無上菩提への十二種の廻向がなされる^⑩。

このことに対してタルマリンチェンは次のように注釈している。

《殊勝な廻向》である聖なる修道の《その》廻向〔作意〕の《作事》は《他の廻向よりも》《最上である》。自他のすべての善根を菩提の支分に振り向ける無上の廻向であるからである。

〔中略〕

廻向の自性は、廻向されるべき事物と廻向の心と廻向者とに対する諦執を断ずることが、順次に、それは《不可得の行相を有したもの、不顛倒の相あるもの、遠離したもの》と言われる。自らの善と仏陀の善を優劣として執着することを排斥するのが《仏陀の》である。六波羅蜜の善に対して優劣として執着することを排斥するのが《方便を有した》である。一切の廻向において三輪としての諦を排斥するのが《無相のもの》と、言説の縁起は幻術〔の如く〕であると知って仏地に廻向し輪廻の因には廻向しないことが、順次に《仏陀によって随喜されたもの、三界に属さないもの》という二つの句（バーダ）と、「それらとは」《別な廻向

は『行相によって《三種である》。《大福德が生ずる本性》の廻向は《下品と中品と大品》によって三種あるからである。¹⁸⁾

廻向作意なる有漏の修道は、勝解作意によって生じた自他のすべての善根を無上菩提の支分に振り向ける無上の廻向である。その際、殊勝な智慧と方便、すなわち諦としては不可得であると証得する智慧と言説として了得された道を有情に説示する方便、によって把握されることが必要である。言い換えれば、廻向されるべきもの（善根）・廻向する対象（無上菩提）・廻向する者（菩薩）の三を不可得な仕方、すなわち勝義として了得せず言説として了得する仕方で廻向しなければならない。

この廻向作意に相応する『二万五千頌般若経』の最初の部分は次のようである。

その時マイトレーヤ菩薩大士はスプーティ長老に次のように語った。「大徳スプーティよ、菩薩大士の随喜を伴った福德の所作事 (puṇyakriyāvastu) は一切の有情と共有化 (sarvasatvāsādhāna) された後、不可得という仕方でそれが無上正等菩提に廻向されるべきです。一切の有情たちの随喜を伴った福德の所作事、そして声聞乗と独覚乗に発趣した者たちの布施所成の

福德の所作事、戒所成の福德の所作事、修所成の福德の所作事、それら「所作事」よりも菩薩大士の随喜を伴った福德の所作事は一切の有情と共有化された後、無上正等菩提に廻向されるそれは最高であると呼ばれ、最上であると呼ばれ、最勝であると呼ばれ、勝れていると呼ばれ、優れていると呼ばれ、了義であると呼ばれ、上であると呼ばれ、無上であると呼ばれ、無比であると呼ばれ、無比に等しいものであると呼ばれます。(以上が殊勝な廻向)

それはどうしてであるのかと言えば、一切の声聞乗・独覚乗の者たちの布施所成、戒所成、修所成の福德の所作事はすべて、自分の抑制 (āmadamaṇa) のために、自分の寂靜 (āmaśamaṇa) のために、自分の般涅槃 (āmaparinirvāṇa) のためであり、乃至、三十七菩提分法や空・無相・無願や四聖諦や「四」無量・「四」静慮・「四」無色や八解脱や九次第定や四無礙解や六神通は自分の抑制のために、自分の寂靜のために、自分の般涅槃のためであるからです。一方、菩薩大士の随喜を伴った福德の所作事は一切の有情たちの抑制のために、寂靜のために、般涅槃のために無上正等菩提へと廻向されるべきものとなるからです。」(以上が

廻向の作事)

その時スプーティ長老はマイトレーヤ菩薩大士に次のように語った。「マイトレーヤ菩薩よ、東の方角の無量・無量・無辺の世界における仏陀世尊たち、同じく南・西・北における、それらの中間の方角における、上・下の方角のそれぞれ一つの方角における無量・無量・無辺の、般涅槃した仏陀世尊たち、彼らは最初の発心に基づいて、乃至、無上正等菩提を正覚し、乃至無余依涅槃界に般涅槃し、乃至声聞乗の者たち、独覚乗の者たちには正法が隠されておらず、その中間には六波羅蜜と結びついた善根があり、彼ら声聞乗の者たち、独覚乗の者たちには布施所成・戒所成・修所成の福德の所作事があり、有学の無漏の善根があり、無学の無漏の善根があり、彼ら如来たちには戒・定・慧・解脱・解脱知見の蘊があり、利益を望むことがあり、大慈、大悲があり、無量無数の仏法があり、彼ら仏陀世尊たちによって法が説かれ、そこでは法を説くことから「有情たちは」預流果に至り、一來果に至り、不还果に至り、阿羅漢に至り、独覚に至り、菩薩の決定位に踏み入る、その彼らによって般涅槃した如来阿羅漢に対して植えられた善根、それらすべてを集めて、

最高の、最上の、最勝の、勝れている、優れている、上である、無上の、無比の、無比に等しい随喜によって随喜します。随喜されるべきものを随喜することに伴った善根を一切の有情と共有化した後、無上正等菩提に廻向し、無上正等菩提に住するものとなります。

しかるに、そのように心を廻向する大乘の者はどのような所縁や事態によって心が起こされ、さらにそれら所縁や事態 (vasu) はかの大乗の善男子善女人によってどのように知られた得されるのですか？」

マイトレーヤは言った。「スプーティ長老よ、かの大乗の善男子たちによって、因相とされて (nimittakriya) 無上正等菩提に廻向されるままにはそれら所縁や事態は了得されないのです」

スプーティは言った。「まず、もし知られない事態や知られない所縁でもってかの仏陀世尊たちが因相とされ「了得され」るとき、十方すべての方角における一切の方角の多数の世界に住し存続し時を過ごしている彼ら「仏陀世尊たち」の善根は、最初の発心に基づいて乃至無上正等菩提を正覚する者たちの、乃至無余依涅槃界に般涅槃した者たちの、乃至正法に住する者たちの、そしてかの声聞乗の人たちの、独覚乗の人たち

の善根、有学の無漏の善根、無学の無漏の善根、それらすべてを集めて、無上正等菩提に無因相という仕方(animitayoga)で廻向すれば、その者には想の顛倒(sañjāviparyāsa)はなごでしよう。無常に対して常とする想の顛倒・心の顛倒(cittaviparyāsa)・見解の顛倒(dṛṣṭiviparyāsa)はなごでしよう。苦に対して楽とする、無我に対して我とする、不寂滅に対して寂滅とする想の顛倒・心の顛倒・見解の顛倒「はないでしよう」。

〈中略〉

マイトレーヤは言った。「スプーティ大徳よ、もし菩薩たちが六波羅蜜において行じ、多くの仏陀たちに親近し、善根を成熟させ、善知識に摂取され、諸法の自相空性を学んだならば、彼らはかの事態、所縁、仏陀世尊、善根、随喜を伴った福德の所作事を因相として無上正等菩提に廻向しないでしょう。二のあり方ではなく、不二のあり方ではなく、因相のあり方ではなく、無因相のあり方ではなく、了得のあり方ではなく、不可得のあり方ではなく、雑染のあり方ではなく、清浄のあり方ではなく、生のあり方ではなく、不生のあり方でないことによつて廻向するでしょう。そして、もしこれら菩薩たち

が六波羅蜜において学ぶことをせず、仏陀たちに親近せず、善根を成熟させず、善知識に摂取されず、諸法を自相として空であると学ばないならば、それら事態や所縁や善根や随喜を伴った発心を因相となして無上正等菩提に廻向するでしょう。

しかし、スプーティ大徳よ、以上のように解説されるこの般若波羅蜜は、新たに「大」乗に発趣した菩薩大士の面前で説かれるべきではなく、同じく定波羅蜜・精進波羅蜜・忍波羅蜜・戒波羅蜜・布施波羅蜜、内空乃至無自性空も新たに「大」乗に発趣した菩薩大士の面前で説かれるべきではありません。それはどうしてかといえば、彼には少分の信・淨信・愛樂・尊敬があるでしょうが、「般若波羅蜜乃至無自性空を聞けば」それは消失するでありましょう。しかし不退転の菩薩大士の面前では「般若波羅蜜乃至布施波羅蜜は」説かれるべきであり解説されるべきであり、乃至無自性空が説かれるべきであり解説されるべきであります。彼はそのような如きを聞いても驚かないでしょうし、恐れないうし、恐怖に陥らないでしょう。もし善知識に摂取され、過去に勝者を供養し、善根を成熟させ、多くの仏陀に親近するならば、スプーティ大徳よ、

菩薩大士は隨喜を伴った福德の所作事を無上正等菩提に廻向するでしょう。隨喜して廻向するその心は滅尽し、滅し、去り、変化します。そしてかの事態や所縁、善根も滅尽し、滅し、去り、変化するのです。(後略)」

その時神々の主シヤクラはスプーティ長老に次のように語った。「スプーティ大徳よ、どのように善男子善女人はそれら善根を無上正等菩提に廻向するのですか? そしてどのように隨喜を伴った福德の所作事をまとめて廻向するのですか?」

スプーティは言った。「カウシカよ、もし新たに〔大〕乗に発趣した菩薩大士が般若波羅蜜において行じ、そしてその般若波羅蜜を因相という仕方ではなく不可得という仕方で捉えるならば、そして同様に定波羅蜜・精進波羅蜜・忍波羅蜜・戒波羅蜜・布施波羅蜜を因相という仕方ではなく不可得という仕方で捉えるならば、内空に対して深い勝解を持った者となるであろう。外空に対して、内外空に対して、乃至無自性空に対して深い勝解を持った者となるであろう。〔四〕無量・〔四〕靜慮・〔四〕無色定に対して、〔四〕聖諦に対して深い勝解を持った者となるであろう。八解脱に対し

て、九次第定に対して深い勝解を持った者となるであろう。空・無相・無願に対して深い勝解を持った者となるであろう。〔六〕神通に対して、一切の三昧に対して、一切の陀羅尼門に対して深い勝解を持った者となるであろう。十の如來力・四無畏・四無礙解に対して、すなわち十八不共佛法に対して深い勝解を持った者となるであろう。そして善知識に摂取されるものとなるであろう。そしてその善知識たちは彼にこの同じ般若波羅蜜・定波羅蜜・精進波羅蜜・忍波羅蜜・戒波羅蜜・布施波羅蜜を義と文字をもって解説するであろう。そして般若波羅蜜を捨離しないように、同じくすべての波羅蜜を捨離しないように、乃至一切の空性、三十七菩提分法、〔四〕聖諦、〔四〕無量・〔四〕靜慮・〔四〕無色定、空・無相・無願、八解脱、九次第定、十如來力・四無畏・四無礙解の十八不共佛法を捨離しない、乃至菩薩決定位に至るであろうと、解説するであろう。そして魔の作用を解説するであろう。それら魔の作用を聞いた後もそれは減少も増大もしないであろう。それはどうしてかといえば、それら魔の作用の自性は見られないからである。〔善男子善女人は〕仏陀世尊たちを離れないであろうし、乃至菩薩決定位

に至るであろうし、そこで善根を成熟させるであろうし、その善根によって菩薩の家系を得るであろうし、その菩薩の家系を決して捨離しないであろうし、乃至無上正等菩提を正覚するであろう。《後略》」

(以上が不可得の廻向)²⁰

ここでは、自他のすべての善根をまとめてそれを一切の有情たちと共有化した後、すなわち一切の有情たちのために、それら善根を無上菩提に廻向することが説かれている。その際、二つのことが注意されるべきであろう。一つは、そこにおいて了得(認識)される善根や無上菩提等の一切は言説としてのものであり、勝義としては不可得であるという仕方では廻向することである。もう一つは、廻向と随喜との密接な関係、不可分な関係である。自他の一切の善根を不可得という仕方では随喜することで増大させ、増大させたその善根を無上菩提へと廻向するのである。

(3) 随喜作意

最後に随喜作意について検討する。廻向作意において見たように、随喜は廻向と密接な関係を持つている。先に示したように、『二万五千頌般若経』においては、すべての自他の善根を随喜によって増大させ、それを一切の有情たちと共有化した後に無上菩提へと廻向すべきことが説かれ

ている。しかるに『現觀莊嚴論』においてはその捉え方が少し異なっているようである。『小註』は次のように述べている。

そのように正しく廻向されたものは増大されるべきであるから、三番目の随喜と呼ばれる「修道」を語る。

方便と不可得「の智慧」の二によって善根を随喜することが随喜作意の修道であると、ここで語られる。(II-24)

世俗の方便によって諸善根を了得して、喜びの心によって勝義として不可得という仕方では随喜する。

以上のこと(有漏の修道)をまとめると、金銀石から金塊を造作する如くに勝解作意によって福德を造作し、金細工師が「金塊を」装飾品に「変える」如くに廻向作意によってその「福德」を正等菩提の支分に変え、随喜作意によって自他の福德所作の平等性を獲得する。²¹これに対してタルマリンチェンは次のように注釈している。

そのように自他の善を無上菩提に正しく廻向されたものは次々と増大されるべきであるから三番目がある。

自他の善根に対して喜びの心によって世俗としての善を次々に増大する方便によって諸善根を了得し勝義として不可得という仕方では証得する智慧に把握されるこ

とによつて随喜するのである。

さて、三つの作事をまとめると、勝解作意によつて「金」鉱石から金塊を獲得する如くに、広大な福徳を新たに造作する。廻向作意によつて殊勝な作事を成就する。その金塊が金細工師によつて装飾品に変えられる如くに、諸善を正等菩提の支分に変えるからである。随喜作意によつて前法での他相續においてなされた善を自らなしたのと等しく、自他の福徳所作の平等性を獲得するからであるというこれが殊勝な作事である。ハリバドラによれば、無上菩提に正しく廻向された善根を増大させるために随喜作意がなされる。そして随喜の仕方、自他の善根を世俗として了得するが勝義として不可得という形で行うのである。その結果として、自他の善根（福徳所作）の平等性を獲得することになる。

随喜作意とは、自他の善根を我がことのように喜ぶことである。自らの善根ばかりでなく、仏陀・菩薩・声聞・独覚など他者のなした勝れた善根を自らなした如くに喜ぶことである。このような随喜によつて善根が増大することは、仏陀を初めとする一切のものや一切の善根そのものが空であり、不可得であることに依るのである。一切は空であることに基づいて、一切のものに関する自他平等性を獲得す

ることに依るのである。そのために、勝解・廻向・随喜の三つの作意においては必ず「勝義として不可得という仕方」という限定句が付加される。

ところで、『現観莊嚴論』においては善根を廻向した後、随喜がなされると解説されているが、『二万五千頌般若経』の経文は必ずしもそのように理解することはできない。

この箇所に対応する『二万五千頌般若経』は次のようである。

その時長老スプーティは世尊に次のように申し上げた。
「世尊よ、かの善男子善女人にとつて、善根を随喜し廻向する福徳の集まりが一つにまとめられて、最高の随喜によつて随喜されます。世尊よ、どのようにして最高の随喜となり、乃至無上の随喜となるのでしょうか？」

世尊は仰せられた。「かの善男子善女人が、声聞・独覚の衆を伴つた過去・未来・現在の如来阿羅漢正等覺者たちの、そして田や一切の有情たちの善法を取らず捨てず、考えず、考察せず、了得しないとき、その如くであれば、彼には次のようなことがあるであらう。どんな法も生ぜず、滅せず、雑染とされず、清浄とされず、そしてそれら諸法は減せず、増大せず、来らず、

去らず、集まらず、無でない。この仕方によってこれら過去・未来・現在の諸法の真如・不真実でないこと・不変な真如、法性、法にとどまること、法に決定していることのままに、「私は随喜した後、無上正等菩提に廻向します」と廻向するであろう。そのように随喜する菩薩大士の随喜が最高となる、乃至無上となるのである。さらに、スプーティよ、その随喜とは別な随喜すべては百分の一の部分にも及ばず、乃至「数で」比べることさえできない^②。その随喜は別な諸々の随喜よりも勝れていると言われる。

さらにまた、スプーティよ、新たに「大」乗に発趣した善男子善女人によって、それら声聞・独覺の衆を伴った過去・未来・現在の如来阿羅漢正等覺者たちのはじめの発心に基づいて、乃至無上正等菩提を正等覺する、乃至無余依涅槃界において転依する、乃至正法に住することがその中間に、布施波羅蜜に結びついた善根、同じく戒・忍・精進・定・般若波羅蜜に結びついた善根、乃至無量の仏法に結びついた善根、それとは別な一切の有情たちの布施所成・戒所成・修所成のすべての善根が随喜しようと願っている「善男子善女人」によってそのように随喜されるべきである。

〈中略〉

そのように不生不滅ということに基づいて無上正等菩提に廻向する。スプーティよ、それが菩薩大士の最高の随喜乃至無上の随喜である。そしてスプーティよ、その随喜を成就した菩薩大士は速やかに無上正等菩提を正覺する。

さらにまた、スプーティよ、十方の中の一の方にガンジス河の砂の数に等しい世界において仏陀世尊たちが住し存続し時を過ごしている、その声聞・独覺の衆を伴っている如来阿羅漢正等覺者たちを、大乘に発趣した善男子善女人は生きている限り一切の樂具によって尊敬し尊重し敬意を示し供養すべきであり、衣服・鉢・臥具・坐具・病氣に必須の医薬の資具によって、尊敬・尊重・敬意・供養によって、花・薫・香・鬘・軟膏・香末・衣・傘・旗・幟によって般涅槃したかの仏陀世尊たちに昼夜精勵すべきであり、そして了得という仕方で戒に住し、忍を修し、精進をなし、定に入り了得という仕方で般若を修すべきであろう。「一方」無上正等菩提に発趣した善男子善女人は不可得という仕方で布施波羅蜜において行じ、戒波羅蜜において行じ、忍波羅蜜において行じ、精進波羅蜜において行じ、

定波羅蜜において行じ、般若波羅蜜において不可得という仕方で行じながらそれら善根を無上正等菩提に廻向する。かの先の福徳の造作は、この「後の」福徳の造作である善根の造作の百分の一にも及ばず、乃至「数で」比べることもさえない。この廻向が最高の廻向と言われ、無上の廻向と言われる。

そのように、スプーティよ、菩薩大士は布施波羅蜜・戒波羅蜜・忍波羅蜜・精進波羅蜜・定波羅蜜・般若波羅蜜において方便善巧によって、不可得という仕方で行じ、それら善根を随喜した後、無上正等菩提に廻向すべきである」(以上が随喜作意^④)

スプーティが世尊に尋ねる中で「善根を随喜し廻向する福徳の集まりが一つにまとめられて、最高の随喜によって随喜される」と述べているので、『現觀莊嚴論』の理解するように廻向されたものを随喜するというあり方が考えられなくはないが、「随喜した後、無上正等菩提に廻向すべきである」(anumodānuttarāyaṃ samyaksambodhaye pariṇāmaye)」という表現が頻出することから、經典の本来の意図は、自他のすべての善根を随喜して一切の有情たちと共有化して増大させた後、それを無上正等菩提に廻向すべきである、ということであろう。

三 まとめ

『現觀莊嚴論』によれば、般若經に説かれる有漏の修道は見道の後に獲得される後得清淨世間道であり、「勝義として不可得という仕方」でなされた勝解・廻向・随喜の三つの作意からなっている。その中、勝解作意は般若經が自利・利他・二利を生ずる処であると確信することである。

廻向作意は勝解作意等によってなされた善根を無上正等菩提に振り向けることである。随喜作意は自他、特に他者の善根を自らなしたかの如くに喜ぶことによって、その善根を増大させることである。そして、それら三つの作意の關係は、金鉢石から金塊を生み出す如くに勝解作意によって般若波羅蜜から福徳を生み出し、金細工師が金塊を裝飾品に変える如くに廻向作意によってその福徳を無上正等菩提の支分に変え、随喜作意によって自他の福徳の平等性を獲得するのであると言われる。また、それら三つの作意は「勝義として不可得という仕方」でなされるから無上であると言われる。一切は空であることに基づいてなされるものであるからである。

廻向と随喜の關係は、『現觀莊嚴論』と般若經では理解の仕方が少し異なるようにも思えるが、本質的な違いはな

いであろう。前者は廻向したものを随喜すると考え、後者は随喜した後、廻向すると考えている^⑤。しかしいずれにしても、廻向と随喜は不可分のものであるからその先後は問題ではないであろう。自他のすべての善根は随喜によって自他平等性を獲得し、一切の有情たちと共有化される。そのことが善根の増大である。そしていずれにしても、善根は無上正等菩提へ廻向されなければならないのである。

略号

- 『俱舍論』; P. Pradhan ed., *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu*, Patna, 1967.
- 『小註』; H. Amano ed., *Abhisamayālmkāraṅkārikāśāstravivṛiti*, Kyoto, 2000; Pek. No. 5191.
- 『大乘莊嚴經論』; S. Lévi ed., *Mañjāvāsūtrālmkāra*, Paris, 1907, rep. 1983.
- 『注釈・心髓莊嚴』; *Phar Phyin rNam bshad snying po rgyan*, Samath, 1980.
- 『二万五千頌般若經』; T. Kimura ed., *Pañcaviṃśatisāhasrika Pajñāpāramitā II・III*, Tokyo, 1986; Pek. No. 5188; 鳩摩羅什訳、大正二二三番; 玄奘訳、大正二二〇番

註

- ① 釈尊最初の説法といわれる『初転法輪經』において、四

諦・八正道が説かれる。八正道とは、道諦の具体的な表現の一つであり、欲望のままのあり方と苦行のあり方の両極端を離れた中道を示したものである。

- ② 三十七とは、四念住・四正断・四神足・五根・五力・七覚支・八正道である。

- ③ 拙著『般若経釈現觀莊嚴論の研究』（文栄堂、二〇〇〇）pp. 129-130 参照。

- ④ 『大乘莊嚴經論』「述求品」において波羅蜜の要素を増大するための四十四の作意が説かれる。これらの中には『現觀莊嚴論』の行の項目と同じものや類似したものも多い。特に第七番目の「行の作意（prātipatti-manaskāra）」として懺悔・随喜・勧請・廻向の四つが説かれることが注意される。そこでの懺悔作意とは吝嗇乃至惡慧の六波羅蜜の所対治分（不善）が生ずることを懺悔することである。随喜作意とは布施乃至般若の六波羅蜜の能対治分の諸行（善）を見て随喜することである。勧請作意とは自他のために如来に波羅蜜の説法を勧請することである。廻向作意とは懺悔・随喜・勧請によって生じた善根を無上菩提に廻向することである。（Lévi 本 pp. 71-72）この箇所以外にも『大乘莊嚴經論』が波羅蜜に関連することは多いが、『現觀莊嚴論』との比較等いずれ詳しく検討するつもりである。

- ⑤ 「二種の修道が説かれた。世間〔道〕と出世間〔道〕とである」（『俱舍論』 p. 327）

- ⑥ 有漏の世間道による断惑については櫻部建・小谷信千代訳

『俱舍論の原典解明賢聖品』(法蔵館、一九九九) pp. 17-18に明快に説明されているので参照されたい。見道の獲得の前にすでに世間道によって修惑を断じていれば、その断の程度により見道獲得後の階位が預流・一來・不還となる。

⑦ 『俱舍論』 p. 366.

⑧ 『俱舍論』 p. 368.

⑨ 『現觀莊嚴論』(根本偈)だけではその内容を十分に理解することはできないので、当該論書を理解するには注釈が不可欠である。古来、諸注釈の中でハリバドラのもの(『大註』『小註』)が最も權威あるものとされているのでここでもそれに基づくことにする。その際、『現觀莊嚴論』の伝統を保持しているチベットでは、『小註』に対するタルマリンチェンの複註『注釈、心髓莊嚴』が尊重されているので、チベット独自の解釈には注意しながら、それを参照することにする。

⑩ 『小註』 pp. 42-43, Pek. 116a7-116b5。

⑪ 『注釈、心髓莊嚴』 p. 304.

⑫ 般若波羅蜜は、名目的に典籍と道と果の三種に分類される。その中、果の般若波羅蜜こそが般若波羅蜜の自性であり、それは仏世尊の幻術の如き無二の智とされる。前の二つ(典籍・道)はそれを獲得するためのもので二次的なあり方として般若波羅蜜と呼ばれる。前掲拙書 pp. 105-106. 参照。

⑬ 『注釈、心髓莊嚴』 pp. 304-305. なお、傍線部は『小註』の語である。(以下も同じ)

⑭ 『現觀莊嚴論』に基づいた科文を有した『二万五千頌般若

經』は、この勝解作意に相應する箇所を自利 (svārtha) ・ 自他利 (svaparārtha) ・ 利他 (parārtha) の三種に分け、さらにそれぞれを下下 (mūḍha-mūḍhi) 乃至上上 (adhimātra-adhimātra) の九種に分け、合計二十七種に分類している。しかし、これらに相應する經文は基本的には以下に引用するような内容違った角度から言及しているに過ぎず、その意味で『現觀莊嚴論』は「勝解作意の自性は般若波羅蜜(母)が自利などの三つの利益を生ずる処であると深く確信すること」と定義するのである。

⑮ 『二万五千頌般若經』 pp. 56-100, 玄奘訳(大正七、152a-66b)、羅什訳(大正八、283c-293a)。

⑯ タルマリンチェンによれば三乗のことである。『注釈、心髓莊嚴』 p. 307 参照)

⑰ 『小註』 pp. 43-44, Pek. 116b8-117a8.

⑱ 『注釈、心髓莊嚴』 pp. 306-307. なお、『現觀莊嚴論』(根本偈)の語である。(以下も同じ)

⑲ Skt 本では「マイトレーヤ菩薩大士」となっているが、羅什・玄奘の両漢訳(大正八、298b; 大正七、175c)とチベット訳に従って「シャクラ」とする。文脈の上でも「シャクラ」とするのが妥当である。

⑳ 『二万五千頌般若經』 pp. 122-128, 玄奘訳(大正七、174b-176a)、羅什訳(大正八、174b-176a)。

㉑ 『小註』 p. 44, Pek. 117a8-117b4.

㉒ 『注釈、心髓莊嚴』 p. 309.

②③ upamīśad の語は解釈が一定しないようである。玄奘は膨大な数の単位としているが、ここでは鳩摩羅什「算数譬喻所不能及」に従っておく。

②④ 『二万五千頌般若経』 pp. 140-142, 玄奘訳 (大正七、181a-182a)、羅什訳 (大正八、301b-302a)。

②⑤ 『大乘莊嚴経論』『述求品』における廻向作意は、懺悔・随喜・勧請による善根を無上菩提に廻向することである。注④参照。

(本学助教授 仏教学)